

教 育 研 究 業 績

氏名 永井 優美
学位 博士(教育学)

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
教育学	教育史、幼児教育史、保育者養成、保育カリキュラム	
主要担当授業科目	教育原理、教職概論、教育課程総論、課題研究 A 課題研究 B、幼児教育基礎演習	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 「教職概論」の授業実践における工夫	平成 26 年 4 月～	「教職概論」の授業の中で、グループディスカッションを採り入れながら、保育者の専門性について学生自身が考えることができるよう工夫している。特に「マシュマロ・タワー」などのチーム・ビルディングの体験的グループワークを通して、チームで保育をすることを学ぶことができるよう促している。大学と短大連合の模擬授業として教員に公開授業を行った。
2 作成した教科書、教材 『新・教職課程シリーズ第 2 巻「教育の理念・歴史」』	平成 25 年 9 月	第 10 章「日本の教育思想と学校の歴史 2ー近代公教育の形成」を担当。田中智志・橋本美保編、132-143 頁。筆者は日本における明治時代から大正時代にかけての教育制度や教育の内容及び方法について記した。「教育原理」や「教育の理念と歴史」の授業でテキストとしている。
『0～6 歳児「言葉を育てる」保育-よくある疑問 40&言葉あそび 20-』	令和 3 年 3 月	幼児教育において言葉をどのように育んでいくかに着目し、現場の保育者にとっても参考にしやすい形でまとめた本書は日本国語教育学会監修のものである。領域「言葉」や教育実践に関する授業の参考書としたい。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 特になし。		
4 実務の経験を有する者についての特記 事項 特になし。		
5 その他 「女性研究者へのキャリアパス」 学芸カフェテリア講座、於東京学芸大学 (講演会) 東洋英和女学院大学生涯学習センター講座 講師	平成 24 年 12 月 平成 26 年 12 月 平成 29 年 2 月 平成 29 年 10 月 平成 30 年 2 月、9 月 平成 31 年 2 月	東京学芸大学男女共同参画推進委員会の企画で行われた講演会において、研究者としてこれまでどのように歩んできたかなどの自身の経験について、研究者を目指す学生を対象に講演した。 東洋英和女学院大学生涯学習センター開催の講座「WMS 研究(カナダ・メソジスト婦人宣教師研究)」と「21 世紀の子どもに生きよう」において、キリスト教教育に基づいた保育者養成・および保育実践の在り方について、研究者や実践者などを対象に歴史的題材を用いて連続的に講義した。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許 司書 資格 取得 社会教育主事 資格 取得 運転免許(普通) 取得 保育士資格 取得	平成 20 年 3 月 平成 20 年 3 月 平成 23 年 3 月 平成 23 年 11 月	東京都-096196、平成 25 年 4 月登録
2 特許等 特になし。		

3 実務の経験を有する者についての特記事項 特になし。			
4 その他<外部資金獲得>		平成 24 年～	「近代日本のキリスト教系保母養成機関における保母養成の実態と特質」
・特別研究員奨励費		平成 26 年～	「保育者の専門的力量形成に関する比較教育史研究」
・研究活動スタート支援		平成 28 年～	「保育者養成カリキュラムの開発と実践に関する日米間の比較教育史的研究」
・若手研究 (B)		令和 4 年～現在	「幼児期の教育と小学校教育の連携に関する比較教育史的研究」
・若手研究			
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項			
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称
(著書)			
1 『新・教職課程シリーズ第 2 巻「教育の理念・歴史」』(再掲)	共著	平成 25 年 9 月 (平成 26 年改訂版)	一藝社
			第 10 章「日本の教育思想と学校の歴史 2—近代公教育の形成」を担当した (田中智志・橋本美保編、永井優美他、132-143 頁)。概要は次の通りである。 第 1 節 近代公教育の創始 第 2 節 近代学校教育制度の確立過程 第 3 節 国家主義教育体制への移行 第 4 節 教育方法の日本的受容の特質
2 『明日へ翔ぶ—人文社会学の新視点-3』	共著	平成 26 年 3 月	風間書房
			公益信託松尾金蔵記念奨学基金編の論文集である。永井優美他、「J. マクドウェルの保育カリキュラム論—アメリカ進歩主義教育実践の導入」(51-66 頁)。 広島女学校附属幼稚園に赴任した J. マクドウェルの年間保育計画や一日のスケジュール、また Japan Kindergarten Union の年報に掲載されたマクドウェルの講演記録を分析することで、進歩主義教育を反映した保育実践が、マクドウェルの指導のもと、同園で行われていたことを明らかにした。
3 『大正新教育の思想—生命の躍動—』	共著	平成 27 年 7 月	東信堂
			第 8 章「樋口長市の自学主義教育論」を執筆した。概要は以下の通りである (橋本美保・田中智志編、永井優美他、256-277 頁)。 1 はじめに 2 樋口長市の経歴 3 樋口の自学主義教育論の特徴 4 川井訓導事件の真相 5 おわりに
4 『近代日本保育者養成史の研究—キリスト教系保母養成機関を中心に—』	単著	平成 28 年 2 月	風間書房
			近代日本における保育者養成の実態と特質を、キリスト教系保母養成機関を中心に明らかにした。概要は以下の通りである。 序章 第 1 章近代日本における保母養成の概況 第 2 章桜井女学校幼稚保育科における保母養成の特質 第 3 章頌栄保母伝習所における保母養成の特質 第 4 章広島女学校保母師範科における保母養成の特質

				第5章日本幼稚園連盟（JKU）の保姆養成に果たした役割 結章
5『大正新教育の受容史』	共著	平成30年1月	東信堂	本研究は大正新教育期の教育実践について受容史の方法によって多様な事例をもとに多角的に検討したカリキュラム史研究である。筆者は第一部「欧米新教育情報と日本の教育界」第一章「モンテッソーリ教育情報の普及」および第二部「国際的視点からのアプローチの可能性」第八章「甲賀ふじによる進歩主義保育実践の受容—保育法研究のプロセスに着目して—」を執筆している。 橋本美保編・永井優美他
6『大正新教育の実践—交響する自由へ—』	共著	令和3年1月	東信堂	本研究は大正新教育期の教育実践を自由の視点から検討した研究であり、筆者は第Ⅱ部教育実践史からのアプローチ、第13章「ランバス女学院附属幼稚園における自由保育の実践—高森富士の保育論に着目して—」（361-388頁）と題して幼児教育分野の論考をまとめた。高森が子どもの活動や自由を尊重する点、子ども理解が重要である点をアメリカの「コンダクト・カリキュラム」の影響によって見出していたことを指摘した。 橋本美保・田中智志編著、永井優美他
7『0～6歳児「言葉を育てる」保育—よくある疑問40&言葉あそび20』（再掲）	共著	令和3年3月	東洋館出版社	幼児教育において言葉をどのように育んでいくかに着目し、現場の保育者にとっても参考にしやすい形でまとめた本書は日本国語教育学会監修のものである。筆者は項目「語彙に広がりをもたせるためには」（50-51頁）、「子どもの「なぜ?」「なんで?」への対応は」（52-53頁）「子ども同士のけんかが起きたときには」（54-55頁）「あいさつが苦手な子どもへの対応は」（56-57頁）、「自分から話したがらない子どもへの対応は」（58-59頁）を担当した。 福山多江子・伊澤永修・大澤洋美・生野金三編著、永井優美他
8『幼児教育史研究の新地平 上巻—近世・近代の子育てと幼児教育—』	共著	令和3年7月	萌文書林	筆者は第2部「海を渡る幼稚園—幼稚園の成立とその世界的展開」の中の、第6章「アメリカにおける幼稚園の普及と展開—小学校教育との関係に着目して—」（161-182頁）を担当した。 太田素子・湯川嘉津美編著、永井優美他
(学術論文)				
1 (修士論文) 「明治期のキリスト教系私立女学校における保姆養成の果たした役割—桜井女学校を中心に—」	単著	平成22年3月	東京学芸大学	日本で初めての私立の保姆養成機関であるキリスト教系の桜井女学校幼稚保育科を取り上げ、キリスト教系保姆養成の特質について解明した。同科では理論と実践をバランスよく組み込んだカリキュラムを編成

				し、卒業研究を行うなど、当時の保育者養成の水準に対して高度な内容を持つものであったことを明らかにした。
2「桜井女学校幼稚保育科の創設と保姆養成の実際—卒業生の実践を手がかりに—」	単著	平成 22 年 11 月	『幼児教育史研究』幼児教育史学会、第 5 号、33-44 頁（査読付）	これまで不明であるとされてきた日本で最初のキリスト教系保姆養成機関である、桜井女学校幼稚保育科の実態を明らかにした。
3「桜井女学校幼稚保育科卒業生吉田鉞の保育思想とその実践—室町幼稚園の保育カリキュラムに着目して—」	共著	平成 23 年 2 月	『東京学芸大学紀要』東京学芸大学、総合教育系 I、第 62 号、19-30 頁	桜井女学校幼稚保育科第 2 回卒業生である吉田鉞という保育者の人物研究を中心に、彼女の保育実践の特質を考察した。特に吉田が主任保姆となった室町幼稚園の保育項目を分析した結果、当時の日本の保育とは異なるアメリカ式の保育実践を行っていたことを指摘した。 永井（田中）優美・橋本美保 調査執筆担当
4「国際幼稚園連盟（IKU）による幼稚園教員養成の標準化—連邦教育局報告書 <i>Kindergarten Training Schools</i> の分析より—」	単著	平成 23 年 9 月	『アメリカ教育学会紀要』アメリカ教育学会、第 22 号、43-57 頁（査読付）	全米最大の保育者連合組織である国際幼稚園連盟（IKU）が進めた保育者養成の標準化について、1916 年の報告書の特徴と、その作成過程を実証的に明らかにした。
5「キリスト教系女学校における附属幼稚園の教育的役割—桜井女学校を事例として—」	単著	平成 24 年 3 月	『学校教育学研究論集』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、第 25 号、1-13 頁（査読付）	本論文では、特に、キリスト教系女学校附属幼稚園が果たした役割に焦点をあて、それが単に幼児教育のためのみならず、母親教育や幼稚園教員の養成のための場でもあったことを指摘した。
6（博士論文） 「近代日本キリスト教系保姆養成史—アメリカ式保姆養成の導入と展開—」	単著	平成 25 年 3 月	東京学芸大学	博士論文では、これまでほとんど着目されることがなかったキリスト教系保姆養成機関を事例とし、戦前日本の保姆養成の実態と特質を明らかにした。当時のわが国の保育実践並びに保姆養成は、主にアメリカからの幼児教育情報に基づいて行われていた。そのため、アメリカ人宣教師を指導者としたキリスト教系保姆養成機関は、官公立の保姆養成機関に比べ、先駆的な実践を行い、戦前日本の保姆養成を質・量ともに主導したことを指摘した。
7「日本幼稚園連盟（JKU）における保育者養成論—保育者の資質能力への共通理解の形成—」	単著	平成 26 年 9 月	『教育学研究年報』東京学芸大学教育学講座学校教育学分野・生涯教育学分野、第 33 号、107-122 頁	キリスト教系幼児教育・保育者養成の専門団体である 1906（明治 39）年に設立された日本幼稚園連盟（JKU）内で議論された保育者の資質能力について分析した結果、①研究的志向を持った保育者、②保護者支援の力量ある保育者という専門職としての保育者像が共有されていたことを解明した。
8「樋口長市の生活教育論—生命思想の影響に着目して—」	共著	平成 27 年 2 月	『東京学芸大学紀要』総合教育科学系 I、第 66 集、67-78 頁	大正新教育の精鋭の一人として知られる樋口長市の新教育研究の過程を検討し、彼の形成した生活教育論の特質について考察することを通して、川井訓導事件への樋口の関わり方についての通説の再考を試み、それについて再検討の可能性が提示することができた。 永井優美・橋本美保・近藤めぐみ 調査執筆担当
9「保育者養成における実習の意義—実習の振り返りから見る学生の成長（その 1）—」	共著	平成 27 年 3 月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育	保育者を目指す学生にとって実習は保育者としての資質を向上させるために必要不可欠な機会である。短期大学 1 年次の最初

			科、第48号、55-70頁(査読付)	の幼稚園教育実習におけるアンケート結果を分析し、学生が実習を通して身に付けた力量や自己課題について考察した。 福山多江子・永井優美 調査執筆担当
10「明治期広島女学校附属幼稚園の保育カリキュラム開発—中心統合法の導入と展開を中心に—」	単著	平成27年3月	『カリキュラム研究』日本カリキュラム学会、第24号15-26頁(査読付)	進歩主義保育で知られる広島女学校附属幼稚園における、マコーレーやクックによる保育カリキュラム開発を、中心統合法に着目して検討し、同園における当時の保育の実態を明らかにした。
11「保育者養成における実習の意義(2)—学生にとってのPDCAサイクル「の重要性に着目して—」	共著	平成28年3月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第49号、89-101頁(査読付)	保育者養成校の学生を対象にしたアンケート調査の結果を分析し、学生の保育現場での学びの事例を読み解き、学生がいかにPDCAサイクルの中で実習の経験を振り返っているかを明らかにした。 福山多江子・永井優美 調査執筆担当
12「幼稚園における学校評価基準資料の観点に関する一考察—実践的自己点検評価の基準と記述—」	共著	平成29年3月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第50号、53-66頁(査読付)	本研究は、幼稚園の自己点検評価方法について考察したものである。保育日誌を基軸とし、保育展開の記録を基に策定される指導計画や実践の外部評価、期間を区切った総括評価などの客観的資料に基づく評価方法により、日々の保育の中で年間に渡り評価を行う利点についてまとめた。 安見克夫・福山多江子・永井優美・木埜下大祐
13「甲賀ふじのアメリカ留学と幼稚園教育実践」	単著	平成29年10月	『日本の教育史学』教育史学会紀要、第60集、32-44頁(査読付)	本研究の目的は甲賀ふじ(1856-1937)による幼稚園教育実践の特質をアメリカの幼稚園教育との関係から解明することである。甲賀が先駆的な実践を行うことができたのは、アメリカ留学で最新の幼稚園教育に触れただけでなく、それをもとに科学的基礎にたつ児童研究に主体的・継続的に取り組んだことによることを明らかにした。
14「大正新教育期におけるモンテッソーリ教育法紹介の傾向と特質—外国教育情報の移入に着目して—」	単著	平成29年10月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第51号、49-59頁(査読付)	大正新教育期に日本に初めてモンテッソーリ教育が流行したが、その流行の傾向を分析し、外国教育情報受容の特質について考察した。モンテッソーリ教育は大正新教育期に進歩主義教育が盛行する先駆けとなっており、幼児教育のみではなく広く教育界全体にインパクトを与えたものであったことを指摘した。
15「実践的指導力の育成を志向して—保育観の形成を通して—」	共著	平成29年10月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第51号、85-94頁(査読付)	これからの日本において教員に求められる資質能力とはどのようなものであるか検討するため、第一に養成段階において教育実習が学生の保育職イメージに与える影響について分析した。第二に、新任保育者の保育観の変容過程とその要因を分析した。 福山多江子・生野金三・大澤洋美・永井優美 調査・執筆担当
16「主体的・対話的で深い学びの研究—幼稚園教諭養成課程における実践—」	共著	平成31年3月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第52号、35-49頁(査読付)	保育者を目指す学生にとって、主体的・対話的で深い学びとはどのようなものであるのかについて、模擬保育を通して分析した結果、学生が保育実践の計画・実践をする中で、子どもの実態に基づき、子どもの主体性を重視することの意義に気づく過程が重要であることを解明した。 福山多江子・生野金三・大澤洋美・香田健治・永井優美 調査執筆担当

17「子どもの加減行為についての一考察」	共著	平成 31 年 3 月	『東京成徳短期大学紀要』幼児教育科、第 52 号、13-22 頁 (査読付)	本研究では、子ども同士の関係する場面、例えば、試行錯誤、葛藤、けんか、いざこざ、折り合いという場面における加減行為を分析した結果、表層部分ではなく、行為を表出するに至るまでの過程となる深層的な自己性の形成する要因に着目することの重要性を解明した。 大澤洋美・安見克夫・福山多江子・永井優美 調査執筆担当
(その他) <報告書・記録・辞典等>				
1「明治期のキリスト教系私立女学校における保姆養成の果たした役割—桜井女学校を中心に—」	単独	平成 22 年 9 月	『教育学研究年報』東京学芸大学教育学講座学校教育学分野・生涯教育学分野第 29 号、110 頁	日本で初めての私立の保姆養成機関であるキリスト教系の桜井女学校幼稚保育科を取り上げ、キリスト教系保姆養成の特質について解明した。(修士論文要旨)
2「教員養成は 4 年制か 6 年制か」	単独	平成 24 年 3 月	『FORUM』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、84-85 頁。	連合学校教育学研究科、合同ゼミナール分科会報告。分科会において博士課程の学生が教員養成は 4 年制か、6 年制かというテーマにそってディベートをした内容を記録・分析したものである。 司会担当
3「明治初期東京女子師範学校における保姆養成の創始と模索—幼稚園教員の専門性形成に関する一考察—」	共著	平成 24 年 3 月	『養成・実践・研修を結ぶ教師教育の在り方に関する実証的研究』(報告書)東京学芸大学、3-13 頁	日本で最初の保姆養成機関である官立の東京女子師範学校における保姆養成政策の変遷を、幼稚園教員の専門性への認識との関連から史実に即して分析した。
4「近代日本キリスト教系保姆養成史—アメリカ式保姆養成の導入と展開—」	単独	平成 25 年 8 月	『博士学位論文—論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、第 16 号、21-25 頁。	博士論文では、これまでほとんど着目されることがなかったキリスト教系保姆養成機関を事例とし、戦前日本の保姆養成の実態と特質を明らかにした。当時のわが国の保育実践並びに保姆養成は、主にアメリカからの幼児教育情報に基づいて行われていた。そのため、アメリカ人宣教師を指導者としたキリスト教系保姆養成機関は、官立の保姆養成機関に比べ、先駆的な実践を行い、戦前日本の保姆養成を質・量ともに主導したことを指摘した。
5「教育の本質をつかむ—教育史研究から見えてきたこと—」	単独	平成 25 年 11 月	『児童研究』聖心学園、第 665 号第 59 号第 4 号、4-5 頁。	保育者として成長するために、教育の本質をつかむという視点が重要であることを、A.L. ハウという人物の記した保育の目的を参照しながら論じた。
6「保育の歴史(明治)」「保育の歴史(大正～戦前)」「保育の歴史(戦後～現在)」「ヨーロッパの保育の歴史」「アメリカの保育の歴史」	共著	平成 28 年 8 月	『保育実践事典』幼少年教育研究所編、鈴木出版、398-407 頁	日本の保育の歴史について明治期、大正～戦前期、戦後～現在期にわたりその概要をまとめた。また、ヨーロッパの保育とアメリカの保育についても歴史的視点よりまとめた。
7「『子どものための哲学』によって子どもの思考力は育成されるのか—保育者養成校の授業における学生の子どもの理解の深化—」	単独	平成 31 年 3 月	『国語教育研究』国語教育学会、No. 563、56-57 頁	コロンビア大学のマシュー・リップマンを中心に 1960 年代にアメリカで開発された教育プログラム「子どものための哲学」(Philosophy for Children, P4C) に着目し、幼児教育と保育者養成の視点から検討した。

8「必修教科・選択教科（科目）」	共著	令和元年7月	『教職用語辞典』（改訂版）、橋本美保編、一藝社	418-419頁の「必修教科・選択教科（科目）」を担当し、最新の動向についてまとめている。
9「幼児期における言葉の育ち-言葉にならない思いをキャッチする-」	単独	令和元年1月	『国語教育研究』国語教育学会、No.571、22頁	幼保部会分科会記録。
10「戦前日本キリスト教系保母養成機関における保母養成の特質-アメリカ人宣教師の保母像に着目して-」	単独	令和元年	『幼児教育史研究』第14号、42-54頁。	シンポジウム記録。「日本におけるキリスト教主義保育の成立と展開」というタイトルのシンポジストの一人として登壇し、その内容を学会誌上にまとめなおしたものである。
11「初期の言語環境の重要性-言葉のあふれた世界に住む-」	単独	令和2年2月	『国語教育研究』国語教育学会、No.574、56-57頁	『3000万語の格差-赤ちゃんの脳をつくる、親と保育者の話しかけ』（ダナ・サスキンド、2018年）に子どもとの関わり方のポイントとして「三つのT」が研究内容の実践への適用として提示されていることに触れ、初期の言語環境の重要性について分析した。
12「「ほめ言葉のシャワー」で進化する幼児の言葉-心が言葉を生み出す-」	単独	令和2年12月	『国語教育研究』国語教育学会、No.584、56-57頁	菊池省三が提唱したほめ言葉のシャワーの実践を幼児教育において実践した保育者について触れ、「幼稚園教育要領」の領域「言葉」との関連性について考察し、幼児期の総合的な遊びを中心とした学びのあり方について提示した。
13 “Higuchi Choichi”	単独	令和3年	<i>The Routledge Encyclopedia of Modern Asian Educators 1850-2000</i> , Routledge 116頁.	1850年から2000年にかけてアジアで活躍した教育者についての記された事典の中で、大正新教育期に活躍した樋口長市（1871-1945）の経歴や功績、果たした役割について記したものである。
14「幼稚園教員養成（Kindergarten Teacher Training）」	単独	令和3年10月	『現代アメリカ教育ハンドブック第2版』東信堂、293-294頁。	アメリカ教育学会によって編集された現代のアメリカの教育に関する諸事情についてまとめた事典において、アメリカの幼稚園教員養成について記したものである。幼稚園教員養成の史的展開、近年の幼稚園教員養成の傾向等についてまとめた。
15「幼児の言葉の獲得過程における「加減」行為-身体知と言語の関係に注目して-」	単独	令和3年12月	『国語教育研究』国語教育学会、No.596、56-57頁。	幼児期の未分化な状態において、諸能力は相互に関連し合い、総合的に発達していくことから、遊びを通じた総合的指導の原則をどの場面でも常に意識し、幼児に関わっていくことが重要である。本稿では特に身体知と言語の関係に注目し、1歳半の子ども「おもい」という言葉の使用と身体知との関係性を検討した結果、加減行為を言葉で言い表す姿がすでに見られることを指摘した。
16「幼児教育から小学校教育に連なる言葉の学びの土台-倉橋惣三の個人対話に注目して-」	単独	令和5年1月	『国語教育研究』国語教育学会、No.609、62-63頁	倉橋惣三によれば、教師が事前に準備して話す「おはなし」に劣らず「個人対話」が教育上、意味の多いことであるという。小学校教育へつながらる親しみの心を土台とした「言葉の伝え合い」の力を育てることについて、倉橋惣三の個人対話論から検討した。
<口頭発表>	単独	平成22年7月	日本カリキュラム学会	日本で初めての私立の保母養成機関であるキリスト教系の桜井女学校幼稚保育科を

1「明治前期におけるキリスト教系私立女学校保姆養成課程の特質—桜井女学校の事例から—」			第21回大会、於佐賀大学（口頭）	取り上げ、キリスト教系保姆養成の特質について解明した。
2「桜井女学校幼稚保育科卒業生吉田鍼の保育思想とその実践—室町幼稚園の保育カリキュラムに着目して—」	単独	平成22年12月	幼児教育史学会第6回大会、於長野県短期大学（口頭）	桜井女学校幼稚保育科第2回卒業生である吉田鍼という保育者の人物研究を中心に、彼女の保育実践の特質を考察した。特に吉田が主任保姆となった室町幼稚園に関する部分においては新知見を提示した。
3「桜井女学校幼稚保育科卒業生亀山貞子の子ども観と保育観」	単独	平成23年5月	日本保育学会第64回大会、於玉川大学（口頭）	桜井女学校幼稚保育科卒業生である亀山貞子がいかなる子ども観と保育観を有していたかを、亀山の卒業論文などを分析することで検証した結果、幼児教育の知識や技術のみならず、聖書や英文学、教育原理など幅広い知見がその土台となっていることを明らかにした。
4「1900年代アメリカにおける幼稚園教員養成の実状—国際幼稚園連盟（IKU）による養成カリキュラムの標準化—」	単独	平成23年7月	日本カリキュラム学会第22回大会、於北海道大学（口頭）	全米最大の保育者連合組織である国際幼稚園連盟（IKU）が進めた保育者養成の標準化について、1916年の報告書の特徴と、その作成過程を実証的に明らかにした。
5「養成段階での教師教育の在り方に関する一考察—戦前日本の幼稚園教員養成機関における養成の特質—」	単独	平成23年12月	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科第8回研究討論会、於弘済会館（口頭）	日本で最初の保姆養成機関である官立の東京女子師範学校における保姆養成政策の変遷を、幼稚園教員の専門性への認識との関連から史実に即して分析した。
6「近代日本キリスト教系保姆養成機関における保姆養成の実態と特質」	単独	平成25年2月	日本教育史学会、於謙堂文庫（口頭）	キリスト教系保姆養成機関を事例とし、戦前日本の保姆養成の実態と特質を明らかにした。アメリカ人宣教師を指導者としたキリスト教系保姆養成機関は、官公立の保姆養成機関に比べ、先駆的な実践を行い、戦前日本の保姆養成を質・量ともに主導したことを指摘した。
7「保育者の資質能力への共通理解の形成—JKUの役割に注目して—」	単独	平成25年5月	日本保育学会第66回大会、於中村学園大学・短期大学部（口頭）	幼児教育関係の在日宣教師による日本幼稚園連盟（JKU）において、どのような保育者像が共有されたかについて考察した。
8「広島女学校附属幼稚園の保育カリキュラム—アメリカ進歩主義教育理論の影響を中心に—」	単独	平成25年7月	日本カリキュラム学会第24回大会、於上越教育大学（口頭）	進歩主義幼稚園教育を受容した広島女学校附属幼稚園の保育カリキュラムの特質とその改造過程について分析した。
9「M. M. クックの保姆養成論」	単独	平成27年5月	日本保育学会第68回大会、於椋山学園大学（口頭）	戦前日本の保育界を主導したキリスト教系保姆養成校である広島女学校保姆師範科（後のランバス女学院保育専修部）の指導者であるM. M. クックの保姆養成論の特質について発表した。
10「学生の実習に対する意識と成果について」	共同連名	平成27年5月	日本保育学会第68回大会、於椋山学園大学（ポスター）	保育者養成校の学生を対象に行ったアンケート調査の結果を分析し、学生が実習先でどのようなことを学び、それをいかに省察したかについて検討した。
11「甲賀ふじのアメリカ留学と幼稚園教育実践」	単独	平成27年9月	教育史学会第59回大会、於宮城教育大学（口頭）	戦前日本の保育界における実践的指導者である甲賀ふじのアメリカ留学の実態を報告した。

12「学生の実習に対する意識と成果について(2)―保育者の言葉かけの視点から―」	共同連名	平成 28 年 5 月	日本保育学会第 68 回大会、於椋山学園大学(ポスター)	実習を終了した保育者養成校の学生に、保育者の子どもに対する言葉かけを省察させ、その内容を分析した。そのことにより、実習の成果と学生の保育に対する意識の変化について考察した。
13「豊明幼稚園における甲賀ふじの保育実践―幼小連携カリキュラムを手がかりに―」	単独	平成 28 年 7 月	日本カリキュラム学会第 27 回大会、於香川大学(口頭)	日本女子大学附属豊明幼稚園における甲賀ふじの保育実践の特質を、日本女子大学附属豊明小学校との幼小連携カリキュラムを手がかりに考察した。日本では 1920 年代に紹介され始める幼小連携という取り組みが、豊明幼稚園及び小学校では先駆的に意識されていたことを明らかにした。
14「19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカにおける日本の保育実践に対する認識―A. L. ハウの影響を中心として―」	単独	平成 30 年 5 月	日本保育学会第 71 回大会、於宮城学院女子大学(口頭)	アメリカ人宣教師 A. L. ハウがいかなる経緯で International Kindergarten Union(アメリカの幼児教育専門組織)の会員となり、同組織においていかなる活動を行ったのか、その実態を明らかにし、アメリカ保育界が日本といかなる接点を持っていたかについて考察した。
15「保育者養成における指導計画作成に関する一考察―アクティブ・ラーニングの形式の授業を通して―」	共同連名	平成 30 年 5 月	日本保育学会第 71 回大会、於宮城学院女子大学(ポスター)	教育課程総論の授業において実施したアクティブ・ラーニング形式の指導案作成の成果と課題を検討した結果、子どもの主体性を重視した保育のあり方など、グループで話し合う中で理解を深めた学生がいたが、グループによって学びの質に差が生じたことから、指導のあり方を再構成すべきことがわかった。
16「幼児期の遊び「加減」の行為が育てる身体知の研究(2)―体験的学び「加減」行為から習得する言語感覚―」	共同連名	平成 30 年 5 月	日本保育学会第 71 回大会、於宮城学院女子大学(ポスター)	本研究においては、体験的学び「加減」行為から習得する言語感覚に着目し、加減と言語(副詞的言葉を含む)発話との関係を明らかにした結果、副詞の産出は認められるものの、一概にその行為と副詞の産出が同定できるとは限らないことが明らかとなった。
17「戦前日本キリスト教系保母養成機関における保母養成の特質―アメリカ人宣教師の保母像に着目して―」	単独	平成 30 年 12 月	幼児教育史学会第 14 回大会シンポジウム(シンポジスト)	戦前日本のキリスト教保母界をリードした二人のアメリカ人宣教師の保母像や養成に対する意識を中心に、キリスト教系保母養成の水準について質的側面から検討した結果、広く日本、アメリカの保母養成の実態を比較することで、キリスト教系保母養成が日本の同時代の養成レベルを超え、アメリカのそれに近いものであったことが明らかとなった。
以上、旧姓田中で執筆・発表したものもある。				